実践研究
私の保育ノート

つながっていくそれぞれの「思い」

平野亜季
（幼稚園教諭）

これは、昨年受け持っていた年長あお組での出来事です。年中からの2年間、担任として一緒に過ごしました。コロナ禍の中始まった一年でしたが、そんな状況でも変わらない子どもたちの生き生きとした姿と充実した日々を思い出しながら、振り返りたいと思います。

毎年年長組が育てている畑の野菜。いつもは子どもたちと植える野菜も、コロナ禍による休園のため、先生たちで畑を耕し、苗を植えました。苗植えはできなくても、生長する過程や収穫を子どもたちと楽しもう！　とその後に期待していました。ところが、そんな年に限って毎日雨続きで太陽が出ず、どの野菜もなかなか生長してくれません……。どうにか伸びたツルからようやく育ったのは、1本のキュウリでした。

待ちに待った記念すべき初収穫。くるくるキュウリを回すとプチンと切れ、自分たちの手の中に。その1本がうれしくてうれしくて

平野亜季（ひらの あき）
十文字女子大付属幼稚園教諭。

飛び跳ねて喜ぶ子どもたち。そんな姿をほほ笑ましく眺めながらも、私の頭の中では（年長2クラスでどうやって食べよう？　スライスしても1人何枚かな……。今日食べたいって声が出るかな）、そんなことを考えていました。でも、喜ぶ子どもたちから最初に出てきた一言は、「もも組さん（年少）とすみれ組さん（年中）にあげに行こう！」でした。（え？　このたった1本を?!）と予想外の言葉に驚いていると、「どうやってあげる？」「ここ切る？」と相談まで始まっています。私が考えていたこととはあまりにも違い過ぎて、驚き感心するとともに、少し恥ずかしくなった瞬間でもありました。少ないからとか、初収穫だから、

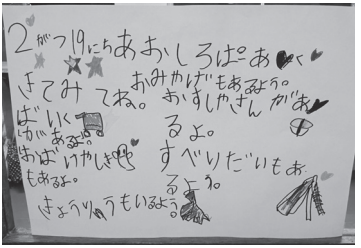
ということは子どもたちの頭にはなく、自分たちの野菜だからあげられる、あげるための野菜、とまで思っているかのようでした。そんな真っすぐな思いをかなえたいと思いましたが、現実的に考えるとやはり数が足りないので……まずは年長組で味見をして、おいしかったらあげに行くことでどうにか話がまとまりました。

後日、再び収穫できたキュウリを塩もみにして、念願の〝お裾分け〟をしました。「食べやすいように、うす～いのにしてあげよう」。キュウリをスライスする子どもたちからはそんな会話が聞こえてきました。

その後もうれしい楽しい出来事があるたびに、下の学年を意識した言動がありました。梅シロップができるとまず「あげたいね」の声が上がり、園庭にミカンがなるとミカン屋

さんを開き、カプラ（板状の積み木）が高くきれいに積み上げられると、年少・年中組の子たちを2階のあお組に「招待して見せてあげよう！」とクラスみんなで張り切り、七輪でおいしいお煎餅が焼けるとやっぱり「あげに行こう」の声が……。遊びや生活の中からは、小さいクラスの子たちへの「やってあげたい」「見せてあげたい」「楽しませてあげたい」、そんな思いであふれる日々でした。

卒園前の2月には、年長組で創り上げてきた遊び（おばけ屋敷やお寿司屋さん、可動式バイク等）を集めた「あおしろパーク」が開催されました。1学期からずっとやりたいと言っていたことがやっと形となり、パーク終了後は、やり切った様子の子どもたちでした。



▲あおしろパークの様子

そうした思いがあふれた背景には〝年中時代に年長さんにしてもらったこと〟が大きいように思います。1年前、大好きなあお組さんから、収穫した野菜を頂いたり、お散歩に連れて行ってもらったり、こまショーを見せてもらったり、きょうりゅうパークに招待してもらったりと、例年以上にいろいろなことをしてもらいました。その時は受け取ることのうれしさと少しの緊張と恥ずかしさで、それだけで心がいっぱいになっていましたが、今思うと、少しずつ「次は自分たちが……」という思いが静かに育まれていったようにも

思います。そして、憧れのあお組になったんだ、という事実が大きな自信となり、今度はぼくたちがやってあげたい！　わたしたちならできるはず！　と、一気に思いがあふれて飛び出していたような感覚でした。

年長さんにしてもらったことや見てきたことが積み重なり、それが基盤となっていたあお組での生活。子どもたちは一年を通して、何かをしてあげることに喜びを感じ、全力で思いを注ぎ続けていました。はじめは憧れの年長さんをまねて「やってあげる」という行為を楽しんでいたかもしれません。でもその思いが続いたのは、自分たちがされたときのうれしさや特別感を思い出したり、自分がしたことで相手が笑顔になったり、感謝される喜びややりがいを確かに感じていったからだと思います。子どもたちと相談や準備をしながら、誰かのためにとか、人を喜ばせるってこんなにワクワクすることなのだなあ、と私もあらためて感じさせられました。

園の最高学年でもある年長児の活動や姿は、それだけ影響力があり、重要な存在・役割となっています。だからこそ誇らしいし、頑張れるし、優しくなれるのかもしれません。

今年は年少組の担任として、昨年とは違った向きから年長さんの姿を見ています。そしてそんな存在がいてくれることの大切さやありがたさを感じているところです。子どもたちはそれぞれに今、お兄さんお姉さんの姿をどんな目で、どんな思いで見ているのかふと考えます。

温かい思いの連鎖、そして幼稚園という集団の中で巡る大きな〝つながり〟を感じる思い出深い出来事でした。